

東京の園児、栄村で稲作 昨年から交流に広がり

2008/5/24



気温が上がる中、服を脱いで田植えをする東京の園児たち

東京都目黒区にある東大駒場地区保育所が、栄村とつながった縁を大事に交流を広げている。昨年度から村内で稲作体験と雪遊びを始め、今度は給食米を生産者グループから調達する計画だ。22、23日は年長クラス8人が村内を訪れ、水田で泥んこ遊びや田植えで汗を流した。

同保育所は東大駒場キャンパス内にあり、教職員や一般市民の子ども40人余を預かっている。重視しているのが野外活動だ。

雪遊びができる場所を探していた落合秀子園長(53)が昨年2月、栄村出身者が家族にいる保育所評価委員の薦めで村を視察。その際、都内で保育士をし10年前に村に移住した顔見知りの鈴木敏彦さん(61)と偶然再会、稲作もしたいと相談を持ち掛けた。

鈴木さんの橋渡しで園児は昨年度、5月末の田植えに始まり、6月の除草、10月の稲刈りまで体験。今年2月には村営スキー場で雪遊びを楽しんだ。

豊かな環境が園児を引き付けたばかりでなく、「何度か訪れるうちに、お米の味が忘

れられなくなった」と落合園長はいう。職員らに栄村産の米を給食に使いたいと提案したところ、快諾された。

交流は保護者にも拡大している。園児の体験談を聞いた親から「栄村に行きたい」という声上がり、本年度は大人中心のツアーを組んだ。5月31日から1泊2日に来訪、給食用の米作りへ田植えをする予定だ。

園児たちは23日の田植えの合間にイモリを捕まえ、珍しそうに観察する姿もあった。「村の自然は都会の子にとって宝の山」と落合園長。昨年に続き田んぼを提供し、田植えのこつを説明した関沢義平さん(74)は「にぎやかな声を聞くと、こちらも元気になる」と話した。

(提供:信濃毎日新聞)